

2007.11月

◇今回は、全国の同人雑誌への呼びかけに応じて、多数の同人雑誌が文芸思潮に寄せられた。その総数は一〇〇冊近くになる。深く謝意を表したい。全国の同人雑誌での文芸創作活動のエネルギーにじかに触れる実感を、そのエネルギーを受け止めると同時に、さらにまたそれらの作品を多くの人々と共有して日本の文芸活動を振興する方向を目指していきたい。新たな気持ちで、この重要な作業に携わる覚悟である。全国の同人雑誌のネットワークをさらに広げ、不備を補って行きたい。

●「水戸評論」(茨城県) 113号・115号

「水戸評論」は六、七〇ページの厚さの手頃な携帯感だが、個性豊か。あまり形にとらわれない浪士風の自由さのなかに、気骨が感じられる。櫻井聡の「迷路を掃く」は題材に清掃業の労働を扱っているが、それに携わる人々の心の機微をよく捉えて、現代の人間の内面の腐食過程を覗いている。文章も気分に流れることなく、しかし思考に停滞することなく、突き放すところは突き放して、文学の距離感をよい位置で保っているところに、視点の確かさがある。この筆者は115号で「私のフリージャズ雑誌」というエッセイを書いているが、これを読んでも、社会や人間の捉え方が鮮やかであることがわかる。この力量をどう文学的野心に向けるか期待したい。むしろこの作者には、「文学的野心」とは、何何賞という単純な脚光に留まるものではないことはよくわかっていることと思うが。「水戸評論」には沼田夢幻の「官能小説家」が分載されているが、性の領域に新味が欠けるのは残念。

●「湧水」(東京都) 37号

「湧水」は水準の整った作品が揃っている。どれも形がよくできていて、これだけ水準を揃えるのは、編集者の力量か。集まっている方々が粒ぞろいなのか。木瓜恵「猫の舌」も、竹迫千尋「アロハオエ」も、飛田一歩「削る人」もよくできていて、しかし揃いすぎているところに、逆に亜木康子「虹のしずく」のような

親戚性愛の艶かしい世界が際立つことも否めない。これは家と性とを扱ったおもしろい世界で、筆者が女性でありながら、男性を主人公として書ききっているところに、手腕が感じられる。この世界をつきつめていくと、かなりおもしろい問題にぶちあたりそうな気配もある。発見や独創には白い眼がつきまとう。ひるまず、ためらわずに突き進んでほしい。

●「街道」(東京都) 9号・10号・11号

武蔵野市の「街道」は薄い雑誌だが、中身は濃い。11号の佐々木欽三「石神井暮色」は結婚した男をなお追いかけてくる女性の強烈な愛慕を軸にしているが、男女の深みの底に通じる匂いやかな糸がいい。これだけで終わらず、もつと連作として、あるいは長編として続いていきそうな気配がある。息をつがせず読ませる筆力でもあるだろう。夜叉にもなり、菩薩にもなる、女性の変容の深みと強烈な姿を描ききれば、立つことのできるパワーがある。

木下徑子「青い火」また10号の「片乳」、9号の「雷鳥沢」どれも筆者のきめの細かい文章が光っている。

文章の流れの背後に流れる緻密な彫りの陰影は、豊かな香りを湛えていて、快い文学の気分でも包み酔わせてくれる。この文章力はかなりのもので、「街道」という雑誌の柱でもあるかもしれない。作品としては「片乳」がまとまっているが、この作者は、こうした小品に満足せず、積極的に一〇〇枚前後の力作に挑むべきである。そうしたポリリュームの文章はいつそう力を備えることが要求されるので、構成とともに、その文章力をさらに光らせる何かが得られるはずである。

●「無尽花」(東京都) 25号

半井澄子「風の道」は精神病院へ入っていた兄と墓参をする話だが、幼年の頃の兄妹の過去の風景を織り交ぜながら進む文章の流れは風の透明な色と交じって美しい。佳品である。

田島朝美「冬じたく」は青春時代、劇団とともに活

動した恋人と三十年後に会って、その恋愛の再びの挿らめきに、自分の生きてきた人生の照射を重ね合わせのストーリーだが、乾いたトーンが一貫して流れている。その枯れつつある乾燥味がいつそう人生の意味の問いかけを色濃く浮き上がらせている。老年を冬と見ての冬支度の意味も納得できる。この作者には、やはり演劇から来るのか、大胆な舞台の仕掛け展開の構造的な深みが覗いていて、つねに人生の意味や現実の根を問ひかけ、その浮薄性に迫る、虚空の味わいがある。これは作者の持ち味なので、大切にしてみたい。

●「米子文学」(鳥取県) 52号

塩見佐恵子「雛子の出発」は精神病院から逃げ出した老年患者・雛子をめぐって看護師の側の搜索をストーリーの軸とする病院ものだが、手堅い筆致であるものの、肝心の雛子の内面や主体性が存在せず、逃げ出されて困っている管理体制とその担当者の心理だけが時を刻んでいて、精神異常とそれをもたらすもの、その社会との軋轢といった人間の存在の根の部分が見えてこない。なぜ逃げ出すのか、小説としての人間の抽出になっていない点に脆弱な骨格を感じてしまう。病院の一面は描かれているにしても、問題の本質に迫ってこない歯がゆさが残る。

「米子文学」は層が厚く、森谷亨堂一郎「漱石文学のひとつの基盤」で漱石の「マクベス」の講義や研究発表に焦点を当てて、一つの基盤を掘り起こしているのは示唆に富んでいる。

●「丘陵地方」(神奈川県) 5号

川崎市のこの雑誌は百合昭平個人文芸誌と銘打っているが、薄い割に、きれいに親しみやすく作られていて、手触りはよい。百合昭平「雨季へ」は、短い歯切れのいい文章に飛び石の上をびよんびよん飛んでいく軽快さが、童心の鮮やかな感覚とマッチして、生新な世界を喚起してくる。この洒脱さの一つの持ち味だろう。世の中を離れて生きているフレッシュな感覚があると同時に、逆にそれでもなお巻き込まれていかざる

をえない社会の煩わしさと腐臭がより濃く浮かび上がっている、しかしこの小説世界には結局童心の鮮やかな現実が似合うのであって、社会での鬱屈の深まりは、そぐわない。しかしそれを入れなければ小説にならないことも作者はよくわかっている。その兼ね合いのむずかしいところがより作者を人間嫌いにし、孤高の方向へ誘うのだが、このジレンマを背負う所に、百合昭平氏の文学の地平がある。矛盾を引き受けるその覚悟によって、いつそその新鮮さは輝きを増すだろう。

●「頌」（東京部）25号・27号

薄い五四ページの雑誌だが、挿画を含めて志操の高さが窺われる。詩もいいものがある。25号では、森野こと「雪おんな」が特にいい。「Hさん」の持つ透明感のあるニヒルな雰囲気はよく描けていて、一編のシヨートストーリーとして完成されている。これは古典の「雪女」を現代に再生させているものだが、27号の同じ作者の「観覧車」よりもその冷たい白さと闇の奥行きがしっかり捉えられている分、世界が生きている。パロディ風のもの、あるいは本歌を下敷きにするそのスタイルを保持してもいいので、こうした古典の怪談に現代の孤独感を重ねて表現していくことは、一つの領域を確立できるのではない。現代の時間だけに限定してしまうと、闇や奥行きが損なわれて、薄さが目立ってしまう。いい味を持っているので、それをどう生かしていくか、考えてほしい。

「頌」には映画の評論が毎号載っていて、かなり密度濃く解析している。映画を題材にした芸術論に肉薄する勢いがある。映画のシーン写真を入れたりするともっと生きるのではないかと思われる。試写会のスチール写真などをもらっておくと、あといろいろ生かせると思うが、いずれにしても映画文芸評論家はそういうので、体系的にやっていると、何かになるかもしれない。

●「日田文学」（大分県）53号・54号

「日田文学」は充実した雑誌で、特に53号は三〇〇ペ

ージを超える。内容も地方の文芸文化としてがっちり立ち聳えているような連山高峰の観がある。編集もしっかりしているし、互いに切磋琢磨して、文章の錬度を高め合っている気配がある。生半可な錬度ではない。ずっしりした重厚さは、古典的ではあるが、根を持っている。この重量はどういうことだろうと不思議に感じているうちに、54号を見て、ふと思いついた。54号は「日田文学」復刊15周年記念として広瀬淡窓の特集を組んでいる。広瀬淡窓は江戸時代の儒学者で、有名な咸宜園の開塾者である。三千名を超す門下生がいて九州の文化の中心をなした。この「日田文学」を見ると、その伝統が息づいている気がする。オーソドックスで、およそ現代に媚びているようなところは微塵も感じられない。古いという批判があるかもしれないが、文化とはこういうところに咲く花であって、この強靱さの上に咲くからこそ、やがて時代を動かす力が生み出されてくるのだろう。これは信頼できる力である。

53号のなかでは近藤勲公「海辺の家」にみごとに造形を感じた。「七十八歳が八十五歳を介護している」から始まる状況は、人生の最後を海辺で暮らす子のな老夫婦の介護の日常を描いて秀逸である。文章の流れは悪いが、的確で手堅い一つ一つの彫琢は、揺るぎがない。オーソドックスな重厚な筆致が、食い込むように心象を刻んでくる。秀作である。他にも赤尾重信「白い太陽」、相加八重「重い骨」、檜原孝子「引き潮の音」、河津武俊「耳納連山」、中山直美「台風」など、実力派の作品がずらりと並んでいる。概して、出だしと最後の一文がうまい。昨今の「文学界」や「群像」など、商業文芸誌の作品よりもはるかに決まっている。この技量は大事にしてみたい。古典的なりリズムでいい。貫いてほしい。

大都市ではカルチャーセンター系の同人雑誌が多くなっている。そうした雑誌は作品のまとまりはどれもそこそこうまいが、地からの力や、強靱な根を感じるもの、得体の知れないパワーのようなものは逆に乏し

くなっている。「売り込み前」のような、予備的な匂いが文学の真の力を減じている場合も多い。その意味でも「日田文学」のような存在はそれらと対局にあるものとして、期待したい。

●「文学世紀」（東京部）33号

遠矢徹彦「伏木」は、いつしよに暮らしていた女がふいにいなくなり、それとともにロシアへ行くことを思い立って日本海の町を彷徨する話である。成田闘争を追懐する影の点描もいい。それにこれから向かうウラジオストックの空想もいい色彩で折り重なっている。短い佳作である。この作者は、成田闘争を題材にした大きなものを書けるかもしれない。七十年代の学生運動、また成田闘争などを本格的に一つの世代の文学的塔として屹立させた書き手はいない。そろそろ書ける時代的な距離が出て来たと思う。「骨を拾う」ことも作家の重要なモチーフであり、文学の土台である。たいへんな作業とは思いますが、いつか出現することを望んでいる。

◇今回は、送られて来た同人雑誌の半分しか目を通せなかった。申し訳ないと思いつつ、限られた時間の中心の作業の限界を痛感している。

世の中には、埋もれた作品がたくさんあるとあらためて感じた。全国同人雑誌の優秀作にさらに巡り会うことを熱望している。また同人雑誌の優秀作の推薦制度も確立して行きたい。

今回の優秀作には近藤勲公「海辺の家」（「日田文学」53号）を推したい。準優秀作は桜井聡「迷路を掃く」（「水戸評論」113号）、亜木康子「虹のしずく」（「湧水」37号）、佐々木欽三「石神井暮色」（「街道」9号）、木下径子「片乳」（「街道」10号）、半井澄子「風の道」（「無尽花」25号）、百合昭平「雨季へ」（「丘陵地方」5号）、森野こと「雪おんな」（「頌」25号）、遠矢徹彦「伏木」（「文学世紀」33号）、相加八重「重い骨」河津武俊「耳納連山」（「日田文学」53号）である。

（作家集団「塊」／五十嵐勉）